

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Hypertensive disorders of pregnancy increase the incidence of febrile seizures in offspring

和文タイトル:

母体の妊娠高血圧症候群と3歳までの熱性けいれん発症との関連

ユニットセンター(UC)等名: 甲信ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名: 甲信サブユニットセンター

発表雑誌名: Pediatric Research

年: 2024 DOI: 10.1038/s41390-024-03057-y

筆頭著者名: 矢部 愛美

所属 UC 名: 甲信ユニットセンター(信州)

目的:

過去の研究で、母体の妊娠高血圧症候群と子どもの神経発達との関連が報告されています。熱性けいれんの発症には様々な要因があると考えられていますが、妊娠高血圧症候群との関連については解明されていません。本研究では、母の妊娠高血圧症候群の有無及び重症度と子どもの3歳までの熱性けいれん発症との関連を調べました。

方法:

3歳時までの質問票を用いて、母の妊娠高血圧症候群の有無及び重症度(なし、軽症、重症)と子どもの熱性けいれん発症の有無との関連について、二項ロジスティック回帰分析を実施しました。その際に、熱性けいれん発症との関連が示唆される共変量について調整しました。さらに、早産児と正期産児に分けた解析も行いました。

結果:

解析の対象となった77,699組の母子のうち、熱性けいれんの有病率は妊娠高血圧のない群、軽症群、重症群でそれぞれ8.4%、10.6%、10.4%でした。正期産児において、妊娠高血圧症候群の有無及び重症度と、3歳時点での熱性けいれんの発症とに統計学的に有意な関連を認めました。早産児では、正期産児に比べて熱性けいれんの発症率が高かった一方、妊娠高血圧症候群と熱性けいれんの発症との関連は認めませんでした。

考察(研究の限界を含める):

正期産児での解析で妊娠高血圧症候群と熱性けいれんの関連を認めたことから、妊娠高血圧症候群は早産とは独立した熱性けいれんのリスク因子であることが示されました。早産児では、妊娠高血圧症候群の有無にかかわらず熱性けいれんの発症率が高かったことから、早産に関連するその他の要因が、子どもの熱性けいれんの発症に関連していると考えられました。妊娠高血圧症候群は、今回の研究で調べた熱性けいれんだけでなく、様々な神経疾患と関連している可能性が示唆されていますが、そのメカニズムは解明されていません。

結論:

母の妊娠高血圧症候群の有無及び重症度と、子どもの3歳時点での熱性けいれんの発症とに統計学的に有意な関連を認め、発症リスク増加の可能性が示唆されました。